

ヴェブレン

有閑階級の理論

1899

Thorstein B. Veblen
The Theory of the Leisure Class An
Economic Study in the Evolution of
Institution

28

消費は実用性から離れ
誇示のために行われる

われわれの経済行動は、経済学が想定しているように決して環境から独立したものではない。われわれの嗜好は、原始的な本能を基礎とし社会的な影響のもとに形成されたものである。この当たり前の主張は、ヴェブレンが生きた時代から現代に至るまで、経済学の致命的な批判であり続けている。

ヴェブレンが活躍した十九世紀末から二十世紀初頭は、アメリカが未開の荒野に挑む開拓者社会から本格的な資本主義社会へ、歴史上類を見ないほどドラスティックに転換しつつあった時代であった。だが、ヴェブレンは、その変化の中に変わらない要素を発見する。それは「略奪」に象徴される野蛮時代の精神である。野蛮時代、男性は他者の財や命を奪うことで、その優位性を示すことができた。特に女性の所有は男性としての面目を保つ最たるものであった。一方で、生産活動に従事することは蔑まれ、名誉あることとはされなかったのである。このような労働に従事しない階級のことを「有閑階級」とヴェブレンは呼んだ。資本主義社会ではこの有閑階級は、顕示的消費という特徴的な行動を採ることになる。これは、財の実用性とはかけ離れたところにある、他人に自分が有閑階級であることを誇示するための消費である。この意味で有閑階級は、自分が有閑階級であることを示そうとすることによって維持されるという自己目的的な構造をもつ。たとえば、女性が男性の所有物であるような社会の中では、女性の衣服はより非実用的でより華やかで高価なものとなる。これは、そのような女性を所有している男性の経済力の誇示につながるからだ。また、有閑階級はスポーツを好み、宗教や政治に関心を抱くことになる。大学への寄付なども、大学教授に有閑階級の要素である教養の高さを代替させるためなのである。さらに賭事を好む彼らの

ソースティン・B.ヴェブレン (1857~1929)

アメリカ・ウィンスコンシン州に、ノルウェー系の移民の息子として生まれる。エール大学で学位を取得した後、シカゴ大学、スタンフォード大学、ミズーリ大学などで教鞭をとるが、名声に比して不遇であった。ほかに『営利企業の理論』(1904)などがある。

◎『有閑階級の理論』(高哲男訳、ちくま学芸文庫)

性向というのも野蛮時代の略奪的行動の形を変えた表現である。略奪的かつ浪費的な行為でもって自らの階級を誇示しようとする人々にとってこれ以上の行為はないであろう。また、有閑階級に属する人々は保守的になる。なぜなら彼らは経済的な事情から切り離されており、その結果現状の変革を求めようという不平不満とは無縁であるからだ。

ヴェブレンは、社会学者の中でもっとも早く進化論の本質を理解し得た人物である。彼の進化概念は、目的性や方向性を持った「進歩」ではなく、個々の行為の累積的变化の蓄積とその淘汰としてのみ描かれる。野蛮時代から続く有閑階級の自己保存的な行動は、資本主義社会においても様々な社会的制度を作りだし、その結果、他の人々の行動を決定していく。行為と制度がらせんを描きながら社会進化を形成していくのがヴェブレン的な世界である。

ヴェブレンはなぜ、様々な社会的な性向の中からこの有閑階級という特殊な集団を選び出したのであろうか。彼は、ワークマンシップのようにほかにも重要な気質を挙げているが、それらは有閑階級の気質に比べてはるかに脆弱と考えている。十九世紀末からの不況期のアメリカで、独占企業が急速に成長しコンツェルン化した結果、いまだかつて無かったほどの富裕階級が生まれたという事実が背景にはあるであろう。しかし、時事的な話題を越えた意味をこの書が持ち得たのは、彼が、資本主義社会に一貫して存在している問題を指摘していたからである。われわれの個性を形作っていると思いついて嗜好や判断の基準が実は、社会的な文脈の中で作られたものであるということに認識するならば、逆に人は自分の置かれた環境に無関心ではいられなくなるであろう。現代社会において消費者の嗜好は企業の側から作られることを指摘したのは、彼の影響を受けたガルブレイスであったが、ヴェブレン自身の思想ははるかに大きく長期的な制度まで視野に入れたものであったのである。彼の思想は、制度学派と呼ばれる一派を形成し、非主流派経済学の一角を形成してきた。そして現在、進化経済学という形で、ゲーム理論などと結びついて新しい経済学の形成に大きな影響を与えつつある。

▼江頭進